

## 特集

### からだ が ひらかれる とき

ひととひとが  
わかりあうのに

ほんとうにひつようなことは

なんだろうか

せつめいでなく

はあくではなく

かいけつでもなく

であい

つらなり

なにかをゆきかわすほうへ

やわらかく

ゆっくりとむかうために

ほんとうにひつようなことは

なんだろうか

\* 今月は、言葉によらないコミュニケーションをテーマに、三人の方と一つのグループを訪ねて取材しました。

## 心でつながるcapoeira (カポエラ)

2~3頁

### 相

手のことを考え、リズムを考え、きれいに動き、そして戦わなければならないので結構忙しいのですが、続けていると頭で考えなくてもよくなる。まるでお互いの影みたいです。相手の表現を見ながら自分の動きが決まる。

...人のことを考えなければいけない。それは人生と同じ。...カポエラは人生。いつか足を無くしても心の中にカポエラがある。楽器を弾くことができる。しゃべらなくても動ける。目が見えなくても音楽を聴く。カポエラには色々なDoor(扉)がある。



## トーキングドラムgrooveで通じあう

4頁



### え

っ、そんなんでわかってるの?」とよく思われるんだと、ヒロミさんは笑いながら話した。彼女と、パートナーであるンジャセニャンさんとの会話を聞いた人たちなら、誰もが抱くであろう正直な感想。彼は、セネガル第二国立舞踊団“シノメウ”の元リーディングドラマー。

ふたりは、99年の年越しにセネガルで行われたダンスと太鼓のワークショップで、子弟として出会い、魅かれあった。ふたりの共通言語は、お世辞にも流暢とは言いづらい英語と、フランス語、日本語、ウォロフ語のミックス。「でもね、何かわかるんだよね。」ふたりは、ことばを超えたところで、自然につながっていた。

## 手話を越えた手話表現...Deaf Unitの試み

5頁

### 静

かなののにぎやか。求められるけど強いられない。はじめてなのに、はじめての気がしない。そこを訪れるあなたは、あらかじめ、ずっと前からその場所があなたのために用意されていたかのように感じる事ができる

かもしれない。なんの前提もなく、「受け入れられた」と感じるこのことのできる場所。はじめてなのに、あっさりとおたしに与えられるもうひとつの「居場所」。そこは、「ろう者」と「聴者」が、「ろう者」にとっての音楽表現を追求する“Deaf-Unit”の練習場。



# 心でつながる

# capoeira

## カポエラ

人と人は言葉を交わさなくても通じ合えるのか。もしかすると、一つの目的を持って集まり、大きなグループ（波）を生みだせたとき、全てを超えてより大きな「つながり」を感じることができるのかもしれない。Abada Capoeira（アバダ カポエラ：Associacao Brasileira de Apoio Desenvolvimento da Arte Capoeira）横浜支部のJulio Cesar（ジュリオ セーザ）さんにお話を聞いた。ジュリオさんは、神奈川県国際交流協会の「ことばと文化セミナー カポエラ（現在、火曜日夜 6-8 555にて開催、秋以降の予定については協会までお問合せください）」の講師でもある。



### 「根っこ」が必要

ブラジルでは柔道と空手を習っていた。その理由は、彼のルーツがある日本に興味があったからだ。カポエラを本格的に始めたのは、来日してから。「カポエラをするとブラジルをちょっと近くにつれてくる感じがする」と語る。彼の中でブラジルと日本という二つの「根っこ」が交差する。

「根っこ」（あるいは伝統）をしっかりと身に付けることは、内にこもることではない。「根っこ」がしっかりしていると、外に向けて太い枝を伸ばせる。



言葉を使わずよりそって教える

例えば、ジュリオさんは、日本以外に台湾や英国でもカポエラを披露した経験がある。「（カポエラを見るのは）みな初めてなのだろうけれど楽しんでた。私たちも即興で知っている現地の言葉を入れたりして楽しんだよ」と振り返る。彼は言う、「しゃべらなくても、同じ気持ちがあれば、いい友達になれる可能性が高い」と。

### 最高のカポエラとは

「カポエラで重要なのは、身体全体を鍛えること。それから平衡感覚、柔軟性も大切。でももっと大切なことは、心をひとつにすること。カポエラは一人のスポーツではない。金持ちでも貧しくても、どんな仕事をしていても関係ない。会話をすると考え方の違いで、ぶつかりあいが生まれることもあるが、カポエラをとおして皆がひとつになれる。そしてポジティブ（前向き）に物事を考えられる。考え方が合わない人がいてもカポエラのとときは合わせられる。国も肌の色も職業も関係ない」と彼は言う。

ときおりステージで披露することもあるが、「時間が割り当てられているからカポエラに『入り込んだ』ときでも止めなければならぬのが残念」と語る。誰かに見せることが主目的ではないのだ。

頭で考えるのではなく、リズムを身体に取り入れ、相手のことを考え（カポエラは輪の中心で2人がしなやかに動く）体が自然に動き始めたときにカポエラのグループ（波）が立ち現れ、その人なりの最高のカポエラが生まれる。

### 祈り

カポエラの一連の構成には、あまり厳しく決められたルールはない。全ては自然のままに。「みなさんのブラジルについてのイメージもそうじゃない？（笑）」とジュリオさんは言う。

あえて挙げるとしたら、「始まるときに

神様に挨拶することかな」とジュリオさん。その神様は特定の宗教の神様でなくてもよい、「自分の中にある神様」だ。そして、「安心してカポエラができますように、怪我しないように、相手にも怪我をさせないように」と優しくてゆとりのある祈りを捧げ、カポエリスタは、輪の中心に躍り出て、曲に身体をあずけていく。

カポエリスタ：カポエラをする人のこと



柔軟性とバランスを同時に鍛える

### 願 い

“こうあるべき”ではなく“こうなりたい”という考え方を人生の羅針盤にすることは、他者とのつながりと心の内側から生み出される発展への願いを生み出す。ジュリオさんは語る。

「相手のことを考え、リズムを考え、きれいに動き、そして戦わなければならないので結構忙しいのですが、続けていると頭で考えなくてもよくなる。まるでお互いの影

みたいです。相手の表現をみながら自分の動きが決まる。ちゃんと相手とのコミュニケーションになっているんです」

「大会にいろいろ出て、相手よりうまくなりたいという気持ちが間違っていることがわかった。今33歳だけど、人と比べるのではなく、自分なりに上手くなりたい、人の上にいるより、人と一緒にいたい。」



輪になって心をひとつにする

「いくつなってもまだ生徒、師匠になってもまだ人生の生徒。毎日覚えなきゃいけないことがあります。カポエラは、人と気持ちを合わせないといけない。人のことを考えなければならない。それは人生と同じ。」

### 言葉にするとこぼれ落ちる

言葉を用いなくても通じ合えるのかということを考えているのに、ジュリオさんからは言葉でカポエラの話が聞いている。ジュリオさんにとっては、カポエラのことを言葉で説明する作業は「しんどい」ことなのかもしれない。

「カポエラの魅力を語るとき、言葉にできないものを感じるか」と訊くと、彼はしばらく考え「難しいね...でもたくさんある」とつぶやきながらこう言った。「カポエラは人生。いつか足を無くしても心の中にカポエラがある。楽器を弾くことができる。しゃべらなくても動ける。目が見えなくても音楽を聴く。カポエラには色々なDoor(扉)がある。」



いろいろな楽器を交替で演奏

### 希望

インタビューの終盤、輪になって歌が始まった。カポエラの起源はアフリカにあるという説がある。私は、「カポエラが日本に根付いたら、アフリカともつながるのだな」なんてことを、彼らのシャツにプリントされた地球の図柄を見ながら、ポジティブに考えてみたけれど、メディアを通じて知る世界は哀しみにあふれていて、一人の力がとても小さく感じられる瞬間があまりにも多い。

そのとき、あるメンバーの背中に描かれた「希望」という文字が目に入った。

私は、言葉を必要としないコミュニケーションについて、大切なことをこぼしながら、前に進むために言葉にして、言葉の

力のはかなさを感じ、そして言葉に救われた気がした。

でもそれは「単なる言葉」ではない、シンプルで本当はだれもが生まれながらにして持っている「祈り」なのだ。(F)



## コラム カポエラへの誘い

16世紀前半にポルトガル人によって奴隷としてアフリカ大陸から連れてこられた人々が、奴隷という身分を強いらながらも、多様な文化との出会いを吸収しながら口頭で伝えてきた表現。カポエラ



の起源についてはアフリカ説とブラジル説があり、初期の頃の資料がないためはっきりしないものの、アフリカの異なる地域から集められた人々が、「センサーラ」と呼ばれた奴隷居住地において、それぞれの格闘技、音楽、宗教儀式をもちより、土着の文化を習合しながら独特の表現をつくりだしていったと言われている。奴隷は格闘技の練習を禁止されていたから、監視の目を盗み、草陰に隠れて練習をした。カポエラという名前は、その草の名前にちなむという。奴隷たちはつねに逃亡を企て、成功した者は、先住民(インディオ)の助けを借りて高地に、キロンボと呼ばれる自分たちのコミュニティをつくった。支配者たちのキロンボへの攻撃をかわすのに、カポエラは多いに役立つ

たという。カポエラを文化と名付けることができるとしたら、それは「たたかひの結果」としての文化であろう。

カポエラは、楽器演奏、歌、格闘演技の三つの要素からなる。楽器演奏や歌には、「カンドンブレ」という宗教儀式的の影響が色濃く残っている。音楽のリーダーをつとめるのが、ピリンバウという弦楽器で、他にパンデーロ(タンバリン)、アタパーキ(ドラム)、アゴゴ(カウベル)などの楽器を使う。ピリンバウは通常、高音・中音・低音の三つがあり、音楽の転調とカポエラ全体の流れを司る。曲自体が、祈り、戦いの開始、火急のとき(監視・敵が来たことを知らせる)などを告げるメッセージになっている。

カポエラは、本来、それに参加する者が円になって演じる。円は、そこがひとつの共同体であることを意味する。いっしょに祈りを捧げ、戦い、楽しみ、ともに充実したときを生きるために行われ、自分たちの絆を強める。だから、見る・見られる関係が固定されてしまう舞台上での上演は、本来の姿と意味と力を削いでしまう。「見る」のではなく「参加する」ときに、その本当の姿にふれることができるのかもしれない。

#### 【参考資料】

ABADA CAPOEIRA YOKOHAMA ホームページ  
([www.geocities.jp/abada\\_yokohama2001](http://www.geocities.jp/abada_yokohama2001))  
CAPOEIRA, Nestor. "The little Capoeira Book"(North Atlantic Books 2002)

## I like!

小さい頃からたたいてる。セネガルでは先生に教えてもらえなかった。ジェンベはdancerから学んだ。続けられたのは、「I like」だから。先生は、好きな楽器だけじゃなくて色々やりなさいと言った。でも、生徒には好き嫌いをいう人が多かった。Saber（セネガルにしかない太鼓）をやるうとする人は少ない、ジェンベだけしたい人が多かった。先生はほんとうにplay,play,playとばかりに言い続けた。（だから大事なのは）"I like"。

Saberを人前でたたけるようになったのは、14か15歳くらいのとき。子どもが生まれたり、結婚式のときとかのセレモニーで、おひねりをもらえるようになったのはこのくらい。ちゃんと習いはじめたのは10歳くらい。女の子はたたかない。でも、やらないけど、リズムは知ってる。

## 太鼓はtalk

たとえばククという同じリズムを刻んでいるのに、みんなそれぞれに違う伴奏をする。ギターとかドラムとかピアノとか違う楽器がいっしょに演奏するように、太鼓だけでも、同じリズムで「違い」をつくれる。リズムにも早いものとスローなものがある。ドウンドゥンはベースの役割。同じリズム

で早さを変えることで「違い」をつくることもある。

太鼓はtalk。beatじゃなくてtalk。ジェンベはいつでもtalking。ミーティングで話すときといっしょです。「はじめ」と「終わり」がある。話し合いだって、誰かが話し終わったら終わる。それといっしょ。

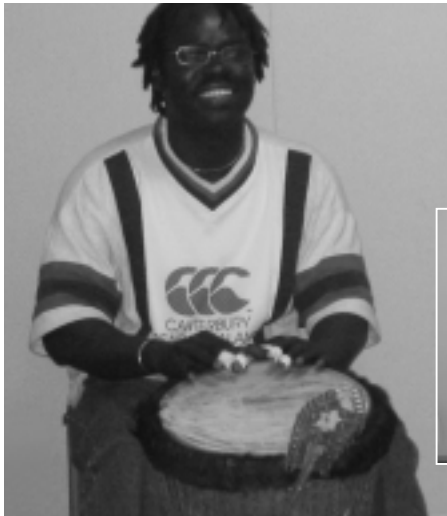
太鼓で「come on おいで」とか、言葉を話すことができる。家でセレモニーがあるときなどに、太鼓で「わたしの家においでよ」ってたたいて、遠くにいる人とも会話ができる。結婚式のときも、「結婚式だよ」ってplayすると、太鼓の音でみんなに伝わる。みんなも（音/言葉を）知ってるから。葬式のときもいっしょ。みんな太鼓でわかる。いまではわからなくなってきたけれど...。「怒っている」「ダメ!」という気持ちも伝えることができる。気持ちは全部太鼓で表現できる。

Danceもtalking。足の動きを見るとメッセージがわかる。Dancerに太鼓も合わせる。手も同じ。Talkする。

## Groove

目と目だけで気持ちだけでリズムが変わっていく。

人だからとか、人種とか、性別とか、育ちが違うとか、関係なく、grooveで通じ合えるものがある。でもそこまで



語る太鼓ジェンベ (Djembe)

ンジャセ ニャン  
N'DIASSE NIANGさん

6月の晴れた夜、アフリカン・パーカッションのンジャセ・ニャンさんと、おつれあいのヒロミさんに取材した。以下はニャンさん談（アミカケ部分のみヒロミさん）



サバー (Saber)



複雑なリズムが心のなかに何かを語りかけてくるようだ

サバー (Saber) の練習風景



いくのは結構たいへん。太鼓は簡単そうに見えるし、たたけば「音」はできるので、「たたけたつもり」になっちゃう人ってけっこういる。いきなりみんなでたたいて楽しいという教え方はしていない。三つの基本音をしっかり伝えるから。あれをたたけないと実は楽しくなれない。続けていけば、絶対うまくなる、うまくなれば楽しい。三つの音がたたけるようになって、grooveがわかってはじめて楽しくなれる。アフリカには数えきれないリズムの数があ、多分、生きている間にはすべて知ることは出来ないのでは... (H)

わたしは教えるのが好き。なんとか努力しようとする人が好き。リズム感のない人に怒ることはない。いちばん大事なのは、太鼓が好きだということ。最初は全然ダメでも、毎週通うことでどんどんたたけるようになる。全然違う。生徒がうまくなると、うれしい。

セネガルでは多くの少年たちに厳しく教えてきた。すごくたいへん（な状況だから）。遊びじゃない。食べるためにplayするから。日本はどこが違う。日本で教えるのは好きだけど、セネガルでは違う。もっともっと練習を厳しくする。食事のとき以外はずっと練習という感じ。↗

## 深く理解したい!

わたしはプロフェッショナルだけれど、いまでも生徒。深く理解したいと思う。わたしがいま、ここでワタナベ・サダオさんとか、いろいろな人とplayするのは、もっと理解したいから。サダオとplayするのはとても楽しいし、しようと思えば楽しくできるけれど、もっともっと理解したい。grooveするのはまだまだ難しい。もっともっと練習しないと。サダオとplayするのも、もっと自分がうまくな（って進化）するため。生徒に厳しくするのも、うまくなってほしいから。生徒とわたしはfamilyだから。

わたしは音楽とか太鼓とかなんでもtryすることがほんとうに怖くない。日本人とかヨーロッパ人とか関係ない。Musicは聴くだけで（人の心の中に）入る。聴けば、その人とplayすることができる。

## ンジャセニャン コンサート&amp;ワークショップ情報

8月1日(日)「ヨコスカジャズドリーム2004」に、渡辺貞夫グループの一員として出演します。場所は横須賀芸術劇場、時間は16:00から。問合せ: TEL046-823-9999

横浜青年館、ヴェルク横須賀等にてワークショップを開催。詳細は当協会、掛田まで(TEL: 045-896-2899)

## 結成

「ろう文化」としての音楽を生み出すために"Deaf Unit" (以下DU) が結成されたのは4年前。すでに「手話音楽」は一定の広がりを見せていたものの、リーダーのちゃかまさんは、「聴者」主導の表現のあり方にどこか物足りなさを感じたという。「そこで表現されている手話表現は『ろう者』には伝わりにくい。音楽の大事な部分が『ろう者』に伝わっていないのではないかと...なんとかしたい...」。1999年ロサンゼルスで開催されたDeaf Expoを経験したことが、ちゃかまさんはじめ、メンバーたちに大きな刺激になった。ポップスやラップ、コントやさまざまな演劇表現などが、手話を媒介に縦横無尽に展開される様子を見て、ちゃかまさんは「涙がでてきてしょうがなかった」という。CSUN大学(カリフォルニア州立大学ノースリッジ校)のASL(American Sign Language)創作クラスなどにも出席し大きな刺激を受けた。それ以来、毎年、メンバーとともにロスに足を運んでいる。DUの手話音楽、コントなどの表現の背後には、新しい地平を見た大きな喜びと、手法・技術のどん欲な吸収と、楽しい修練が横たわっている。↗

## represent (表現する・代表する)

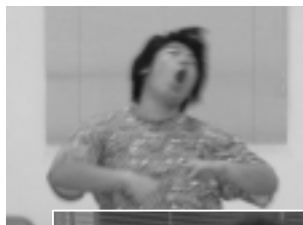
たとえば「眼の奥のかすかな光」という歌詞の一節を聴者ならどのように表現するだろう。声の張り、音の高低に、イメージから喚起される気持ちの抑揚を重ねるかもしれない。DUでは、聴者のメンバーが伝えるこのような詩のイメージをもとに、詩の解釈を徹底的におこなっている。表面的な意味を手話に直訳するだけではメッセージが深く「ろう者」に伝わるとは限らないから、手話表現としてより適切な言葉にまずは作り替えるという。聴者スタッフとの密度の濃い議論を重ねた結果、最もその歌のメッセージを表現すると思われる凝縮された「言葉」が集団のなかから編み出される。さらに、手話そのものでは表現しきれない事柄・感情、いわば字面の裏にある表現の肌理(きめ)のようなものを表すために、通常の手話を越えた身体表現がそこに付加される。一つの表現を生み出す真剣な議論のなかには、恐らく、メンバーの、「ろう者」としての来し方がほの見えることがあるだろうと思う。DUの表現が持つ魅力の中心は、この自らに刻まれた生の軌跡と、表現の「肌理」とが静かにひっそりと重なっているところにあると感じた。練習中に見た「アイシテル」という言葉の表現の深さと広がり、胸の奥にそっと触れられたような気がした。わたし↙

## Deaf Unit

東京都内のボランティアセンターの一室で練習する"Deaf Unit"をたずねた。



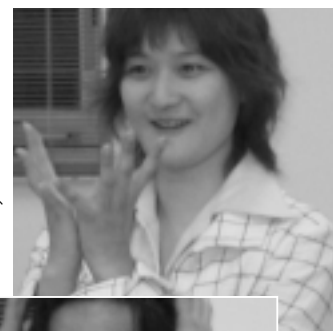
演出するちゃかまさん



ひるたんの、バットに撃たれたボールの気持ちに「変で」笑ってしまう



サブリーダーのえむくんの演出は繊細



世界に一つだけ、ここに咲いた花



リードボーカルの海人さんは音楽がきらいだった

しのなかの生の軌跡のある部分が共振したからだと思った。だから、わたし(ザイニチガイコクジンの?)はあらかじめここに「居場所」が用意されていたと感じたのかもしれない。「ろう者」に限らず、フリーター、中学生、ひきこもりの経験を持つ人、ザイニチガイコクジン...さまざまな人々がありのままの自分を持ち寄ることができるのも、そこに理由があるのかもしれない。

## 「変」?

ちゃかまさんは、会うと必ず、一度は、「ぼくって変でしょ?」と聞く。

集う仲間たちも一緒に「変だ」と笑いながら言い、お互いがお互いを「変だ」と言い合って笑っている。この言葉遊びからわたしは何を読みとることができるだろう?確かに、「常識」からすれば、「ろう者」の「音楽」は形容矛盾で「変」かもしれない。でもDUのみんなが笑いながら自らに放っている「変」は、このような「変」ではない。社会のなかでなんらかの形でマイノリティでありながら自らを表現する人は、「困難を克服した立派な方々」という物語で覆いかぶされることが多い。それは、みじんも「変なところのない方々」の謂いなのかもしれない。DUの「変」は、↗

このような「立派」さのレッテルに対する照れ笑いではないだろうか。そういえば、わたしもそのような照れ笑いをするのがしばしばあるではないか! DUのメンバーに「おたくのホームページマジメだね」と言われて照れ笑いをしている自分がそこにいた。身体を張っているいろいろな表現を繰り出すDUのコントは、とって「変」な人たちによっても「変」な作品だ。

## これからのこと

当初は5年の計画で結成されたDUがこの10月にひとつの区切りをつける。「ある程度のことはやったから」だそう。次は、まだ考え中だが、「映像かな? 障害をテーマにしたドラマが流行しているけれども、なんだか嘘っぽいし...」とりあえずいまは10月の公演に集中している。「できればリハーサルから見てもらえるといいと思う。本番とのギャップがおもしろいと思うから。見てくれる人がいると何かが変わる。アドリブもたくさん入るし...(笑)」(K)

公演は、10月2日(土)午後4時から、  
新宿文化センター大ホールで。  
問合せ・申込み: FAX: 020-4668-9379  
E-mail: office@deaf-unit.jp

## パレスチナ難民の半世紀展

～ 国連が支える難民の暮らし～



©UNRWA photo by George Nehmeh, 1967

国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA・アンルワ）は、1948年に起きた第一次中東戦争で家や生活の糧を失った約75万人のパレスチナ人に緊急援助を行うために設立されました。1950年の設立以来、中東のヨルダン、レバノン、シリア、ヨルダン川西岸及びガザに住むパレスチナ難民に、教育、保健衛生、福祉などのサービスを提供して

きました。現在、アンルワに登録するパレスチナ難民の数は400万人以上。その三分の一以上の人々が難民キャンプに住んでいます。

アンルワでは、約80点の写真パネルを展示し、設立から半世紀あまり経った今日までの、アンルワの活動が支えているパレスチナ難民の暮らしを紹介します。写っている風景やこどもたちの表情

から難民生活の変遷、現状を知ることができます。

この写真展が、アンルワという国連機関の活動とパレスチナ難民の生活について知っていただく機会となれば幸いです。

会期：7月29日(木)～8月29日(日)  
月曜日休館

午前9:00～午後5:00

会場：**アールワ** 3階 企画展示室

入場料：無料

協力：国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）

国際連合広報センター

問合せ：地球市民学習課（担当：矢澤）

TEL：045-896-2898

\* 祝日除く月曜休み

### 関連企画

#### NGOが支えるパレスチナ難民の暮らし展

会期：8月14日(土)～29日(日)  
8月21日(土)

午後1：45から約20分、JVCの職員による写真の解説があります。

協力：（特活）日本国際ボランティアセンター（JVC）

### 地球規模の課題に関するセミナー

## パレスチナ難民支援の現場から



“難民”とはどういう人たちのことをいうのでしょうか？なぜ生まれるのでしょうか？紛争などによって自分の家を失い、“難民”となった人びとの生活と支援の状況を、NGOの活動報告を通し、難民の発生する原因や今の私たちに何ができるのか、どうすべきかなどを共に考えます。今回は、世界約20カ国でさまざまな支援活動を経験し、「真に意味あるプロジェクト」の展開に努めてきた日本国際ボランティアセンター（JVC）によるパレスチナ難民支援活動を現地スタッフより紹介します。

日時：8月21日(土) 午後2：30～4：30

協力：（特活）日本国際ボランティアセンター（JVC）

主催：神奈川県（地球市民かながわプラザ）

（財）神奈川県国際交流協会

場所：**アールワ** 1階会議室

参加費：無料

定員：70名 事前にお申込みください。

問合せ・申込み：地球市民学習課（担当：佐々木）

TEL：045-896-2899 祝日除く月曜休み

## 夏休み子ども地球市民クラブ2004

## 自然の中で育むハーモニー

音楽やもの作りなどをとおして国際理解や多文化共生について考えてみませんか。今回は自然の中で長い時を経て育まれてきた文化に焦点をあてて、踊り、歌、楽器づくりなどを体験します。自分で作った楽器を使ってみんなで合奏してみましょう。

日時： 7月23日(金) 7/25(日) 7/27(火)  
各日13:30～16:30

場所： ㊦㊧㊨㊩ 3階企画展示室  
㊦㊧㊨㊩ 2階プラザホール

対象： 小学校3年生～高校生  
(保護者との参加も可能)

定員： 各回30名

参加費： 無料( は材料費500円)

内容

風の音を聞いてみよう!～アイヌ音楽と楽器づくりに挑戦～  
・民族楽器のムックリ製作

・民族楽器トンコリの披露など

山の民が育ててきた楽器～フィリピン・竹を使った楽器で遊ぼう～

・竹の楽器の紹介

・トンガトンの演奏に挑戦など

森から音楽が生まれる!～レッチェを作ってみみんなで合奏～

・アルプホルンの演奏

・レッチェづくり(日本でいう「ささら」。両手で持ってか  
ちかちか音を出す楽器)など

問合せ・申込み： 地球市民学習課(担当：菅沼)

TEL：045-896-2899 祝日除く月曜休み



トンガトンの合奏

## ことばと文化セミナー

## ベトナム料理講座

かながわには、3千人以上のベトナム出身の方が住み、その数は全国で一番となっています。お話と料理の紹介を通じて、ベトナムの文化・習慣・食生活について、またかながわに住むベトナム出身の人々の生活・思いについて知ってみませんか。

【文化紹介講座】文化紹介、民族衣装(アオザイ等)試着、コーヒーとお菓子の紹介

日時：文化紹介講座 8月21日(土)13:00～16:00

場所： ㊦㊧㊨㊩ 1階 ワークショップルーム

受講料：2,100円(税込・茶菓付) \*協会会員は、1,890円

【料理講座】「巻く」をテーマにした、3種の春巻きを紹介。

夏バテに効くおかずやデザート。

日時：9月1日・8日・15日 毎週水曜日 全3回 10:00～13:30

場所： ㊦㊧㊨㊩ 1階 料理室

メニュー：第1回 ゴイクン(生春巻き)、パイン・セオ(ベトナム風  
お好み焼き)デザート

第2回 揚げ春巻き、ブン・チャーゾ(冷やしビーフン)、  
チェ・チュイ(デザート)

第3回 蒸し春巻き、カイン・チュア・マー(魚類の  
甘酸っぱいスープ)、デザート

受講料：10,500円(税込・3回分) \*協会会員は、9,450円

【講師】トルオン・ティ・トゥイ・チャンさん

ベトナム語通訳、泉区役所外国人相談員。かながわベトナム親善協会のメンバーとして、県内各地で文化紹介や料理講座に講師として参加しています。

問合せ・申込み：国際協力課(担当：富本・上原)

TEL：045-896-2964 FAX：045-896-2945

祝日除く月曜休み E-mail：minsai@k-i-a.or.jp



## 絵本の展示とブックトーク

## 絵本で知る東欧・中東・ロシアの国々



2000年から毎夏「絵本で知る世界の国々」と題して、アジアをかわきりに、2001年北  
欧、2002年カナダ・オーストラリア・ニュ  
ージーランド、2003年西ヨーロッパと巡り、  
展示と絵本の紹介をしてきました。

2004年は東欧・中東・ロシアの国々で出  
版され、日本語訳されている絵本を一部原書  
とあわせて展示します。また、1日2回、ブ  
ックトークと読み聞かせもあります。今回と

りあげる地域は、紛争が続いている国々も含まれていますが、国境や国名が変わり続ける地域でも、人々の心の中に生き続けてきたお話がたくさんあります。子どもたちに楽しい物語を伝えようとしている人々の思いを少しでも感じていただけたらと思います。

日時：7月16日(金)～21日(水)

午前10:00～午後4:00

ブックトーク 午前11:00～11:30

午後1:00～1:30

場所： ㊦㊧㊨㊩ 3階企画展示室

参加費：無料 協力：かながわ子どもひろば

問合せ：地球市民学習課(担当：矢澤)

TEL：045-896-2898 祝日除く月曜休み

食と暮らしの体験セミナー コンドルは飛んでいく  
ケーナを作ってアンデスの音楽にふれよう

「食」や「遊び」等を通して、子どもたちに世界各地の暮らしや風土を紹介しています。今回は、アンデス地方のケーナ作りや楽器演奏などです。昼食には藤沢の国際交流グループ「スバル」の方が作ったペルー料理を用意します。

ケーナは笛、音楽のジャンルは南米のフォルクローレです。都合により内容が変わることがありますのでご了承ください。

日時：8月8日(日)10:00～14:00頃

場所： ㊦㊧㊨㊩ 1階ワークショップルーム

対象：小学生以上 子ども優先(親子参加も可)

定員：25名(事前申込制、先着順)

外国籍の方大歓迎。

成人のみのお申し込みも若干名受け付けます。

参加費：無料(ケーナ材料費、食材費が1,000円)

エプロン、タオル持参

問合せ・申込み：地球市民学習課(担当：佐々木)

TEL：045(896)2899 祝日除く月曜休み

URL：<http://www.k-i-a.or.jp/news/shoku/shoku.html>

## アートと環境 ～自然の絵の具で絵を描こう～ 夏編

あーだ 35 周辺を巡り、採集した土などで絵を描きながら、地域や人とのふれあいを通して、身近なところから様々な環境問題について考えるきっかけを子どもたちに提供します。

日時：7月24日(土) 10時～15時

集合場所：あーだ 35 1階

ワークショップルームに9:45に集合

対象：保護者と幼児・小学生30組程度  
参加費：無料(事前申込制、先着順)  
持ち物：お弁当、飲み物、敷物、タオル  
問合せ：地球市民学習課(担当：相場)  
TEL：045-896-2899  
FAX：045-896-2945  
E-mail：aiba@k-i-a.or.jp  
祝日を除く月曜休み

## コミュニケーション能力開発セミナー

様々な表現活動をとおして、こどもの自己表現力を高め、コミュニケーション能力を開発するリーダーのためのセミナーです。

**セミナー**：7月19日(月) 20日(火)

午前の組：10:00～12:30

午後の組：13:30～16:00

(両日とも同じ)

**セミナー**：8月10日(火) 11日(水)

13:00～15:00

場所：あーだ 35 1階創作スタジオほか

対象：主として教育関係者など、子どもの育成に関わる方  
定員：25名(各セミナーとも2日間連続参加可能な方、事前申込制、先着順)  
参加費：無料(要展示室観覧料)  
問合せ：地球市民学習課(担当：佐々木)  
TEL：045-896-2899  
祝日を除く月曜休み  
URL：<http://www.k-i-a.or.jp/news/yousei/yousei.html>

## 地球市民学習リーダーセミナー「まなびの道具箱」

### 第1回

時事問題を教室へ～メディアリテラシー教材「グローバル・エクスプレス」(日本語版)を使って

日時：7月30日(金) 13:30～16:00

講師：石川一喜さん(拓殖大学国際開発教育センター非常勤講師/開発教育協会)

### 第2回

スーツケース貸出教材「カレーキット」を使った地球市民学習

日時：8月20日(金) 13:30～16:00

会場：あーだ 35 1階会議室ほか

対象：教育関係者、NGO関係者など30名(事前申込制、先着順)

申込み方法：参加する回、氏名、所属(学校・団体名)

連絡先(TEL・FAX・E-mail)を明記してTEL/FAX/E-mailで

問合せ：企画情報課(担当：山内) TEL：045-896-2896

FAX：045-896-2945 E-mail：kikaku@k-i-a.or.jp 祝日を除く月曜休み

## ことばと文化セミナー 太極拳で身も心もリフレッシュしよう! 初心者大歓迎!

太極拳は、中国文化を代表する歴史の古い健康法の一つです。内臓機能の障害・肩こり・腰痛の予防や緩和、疲労回復、ストレス解消にもなります。初心者の方も大歓迎です。みなさんの参加をお待ちしています。

期間：9月1日(水)～11月24日(水)

全12回毎週水曜日

10:30～12:00

定員：20名

受講料：15,750円(税込)  
(会員：14,700円(税込))  
(事前申込制、先着順)  
問合せ：国際協力課(担当：上原)  
TEL：045-896-2964  
FAX：045-896-2945  
E-mail：minsai@k-i-a.or.jp  
祝日を除く月曜休み

神奈川県国際交流協会(KIA)は - 地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切にしたい「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

### あなたも会員になりませんか?

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した『Hello Friends』『サラダボウル』をお送りします。

当協会の出版物の割引サービスが受けられます。

会員の方を対象にした催しへご招待します。『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。

会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

あーだ 35 のレストラン「メルヘン」でお食事の場合、会員証の提示で、コーヒー、紅茶、グラスワイン、ソフトドリンクの一品サービスが受けられます。

あーだ 35 ショップ「ベルダ」で2,100円以上(税込)購入の場合、会員証の提示で10%割引が受けられます。

年会費：一般	3,000円から
学生	1,500円から
団体	10,000円から

\* 会員登録をご希望の方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

当協会は、2003年4月より、あーだ 35 の施設運営を含めた全事業を神奈川県から受託しました。



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

Hello friends 2004年7月1日発行 第239号

発行/財団法人 神奈川県国際交流協会  
〒247-0007  
横浜市栄区小菅ヶ谷1丁目2番1号  
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階  
045-896-2626 FAX:045-896-2945  
URL：<http://www.k-i-a.or.jp>  
E-mail：kikaku@k-i-a.or.jp  
印刷/株式会社エイコープリント

キャラバン・サライ  
わたしは、いま、なぜここにいるのだろう。あなたの選択肢をくりぬけて、ほかでもない、「いまここ」に、なぜわたしはいるのだろう。わたしの来し方はいかにさまざまか。ひとつひとつの岐路にあって、他者が、粘土細工のようにわたしを、静かにゆっくりと形づくってくれた。その痕跡は、わたしの記憶に残る形で、あるいは記憶からはこぼれ落ちる形で、わたしのからだの「皺」のひとつひとつに刻まれていくに違いない。ときどき、ぼくは、いつか変わる「わたし」とつぶやいている自分を見つめる。シゴトは「人」の「役割期待をこなしながら、ふと立ち止まってみると、「立派さ」のなかにとどまることとする自分に気づきそうとすることがある。自分のことを「変」と思うのは、そのような「立派さ」に対する恥ずかしさの現れなのかもしれない。事柄を整理し、課題を把握し、解決に向けた方策をつくる。それらの営みは、すべからず「仕合わせ」に与するために編み出されたものだったのだけれども、そのような営みが「立派」にならばなるほど、恥ずかしさが芽生えてしまうのは、わたしのからだに刻まれた「皺」が疼くからだだろうか。(企画情報課 金野野)

キャラバン・サライとは、かつてシルクロードにあった隊商宿。文化・情報の中継点となっていました。協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付けました。